

藩鑑卷之百六十二目錄

七部九

藤堂私泉守及原高虎

藩鑑卷之百六十二

藤堂私泉守高虎

為侍者常々覺怪之事

一 寢食をゆるよりその日の元書とん  
得へかやうと覺怪しと寝るゆへ  
ふたたび動する事あるは是を平定す

多々  
虎城雜談  
下回

一帯く諸事にならざりて略さふこと  
人の自然のときいふふ合のふりて  
そんちや深きゆへに言ふこと  
とりの法よきなり——不仕合も  
ふふ合のときも常にならば  
と人あはれは仕合は非なる——と  
さすは言ふこと外もさすは  
是徳よりすや

一帯にあま油断は費えたる人の自  
然のときいふふ合のふりて  
る——とらふ又ふに合するといふ  
者ふらばなるといふはと物と  
らむる是面自なることなり  
一出陣のときと紋軍すると費え候もの  
事勝軍はとてり——級軍はとてり  
らるる——とたぬこと

一 月よまゝなる具は是れ武道具の始なり  
上帯ハ布より

但し帯は結ふへー 同下帯布  
よー 仕之根是あり

一 刀服指お前よりうん袋懸くへー

一 二重腹帯の事

一 大さきある馬あり

一 陣道具はうさ色ありー 紺糸より

色くありー とも書付にとも  
り

家来常く下は松と事

一 第一情をかり諸事見のうー 事

肝要ありたいきこる事是あり

しー 其方は因果たるへー 理非

を明し中身は是とも物とも若し

かー するはあー へー 儀も同

能く一切をどうにかしとせしむる  
べし

一 家人の縁とせしむる分にはと思  
ふに存する上下縁のお徳よとせし  
むる是れ大抵ありて鬼角情として下は  
徳多し一とせしむる命とせしむる  
情よとせしむる縁多しとせしむる命  
と捨るはしとせしむる命とせしむる

深く情をかんと思ふ主人の用も  
まこと第一とせしむる

一人のさしとせしむる又横月ハワとせし  
むるはるり縁とせしむる者ありとせしむる  
ゆゑ人としてさしむる人と常に其接接  
とせしむるあつと何事とも不問や  
よきとせしむるは別他也

一 良仕者に好む者悪む者あるまじく

其人をた得る事ならんまはるまじくは  
ハ人屠なる事あるに得ぬ事と申す  
みより情明す結句腹と云る事  
是主人の目明くるゆゑあるに我れを  
くよりみへし事あり

一我れ家来たりとも笑んや若あは  
し〜関へ〜世なる其れは法をささ  
〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

り等〜して其極の事ハ用ひ又ささ  
らある事ハ捨へ〜必は主人みより  
門のかと〜して主人へ笑見たるハ推  
〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜  
忍人なり〜我家を頼む〜あふ成ら  
ぬ者ハ陰ふて指をさ〜他の家来よ  
語り傳へ名をささる者数人あり我  
も家来もなるといふ事あり

け深き主人の家まの名を三の他此  
家ま主人の他法と尋るとも怪  
す主人のら持肝要あり

一 侍う侍とつふ是時ハ仕合あらと云く  
云侍ふと云く〜ら〜ら〜ら〜に成候す  
〜〜〜天道の〜ら〜ら〜

一 他別人ある者ハ上下とも〜ら〜  
〜律裁少〜一云ま句の偽と〜ら〜

一人を疑ふ〜〜に但時の〜ら〜  
〜ら〜偽り交り〜も若〜〜ら〜  
も人の害ある事〜ら〜

一 不新人の噂と〜ら〜一人の〜ら〜  
ハカ上けある〜ら〜一人の〜ら〜  
とも大方ハ〜ら〜に深〜ら〜悪  
〜ら〜□□たる〜ら〜成〜ら〜

一 主人よ〜ら〜物〜ら〜又〜ら〜

へまうらすへーあまーあ〜ハトこま  
ても迷惑お夜へーと公得をさう女  
人ら我身とつり〜人の痛さを紙  
き〜あ〜

一 家おま〜に情をかか目と明は仕  
ふ事〜主人のつり〜にあ〜にや主人  
情深〜に下人よ〜まれな〜り  
あ〜ハ天罰道〜す〜急ち〜あ〜

出来命とを失ふ事眼前あ〜

一 主人〜者ハ不測月の氣をかね諸  
事〜に恥おとも〜思事〜あ〜腹も  
ま〜〜す〜あ〜一人二人長仕者ハ程  
ん得ま〜

一 主人の月の明〜と〜ハか〜す禍  
多〜を〜放する者とも身〜に  
産氣〜入る〜を〜恨ひ〜と〜せ念



みりすくふ好とを人氣をかく  
暇とらるものあらま主人の體より  
はあまな氣の入旅の者たまひす  
る

一 忽と主人ハ月ふとと一氣色一  
くむららるるにうらみく  
すのあまのいふとくすん  
もどく未練とるく一第一はま外

このあまのいふ主人ハむと人とも  
らハ氣ハ其勞き一とあらま  
位格ハ口はく下人ハあま  
はせら一と云人ハ毎事ハ一に下人  
覺え笑入るものあら

一 身ハ高悟とる人ハせん近一  
一 云あま多し一とあま一と古人云  
傳へり誠ハ服たあら



主人の氣は遠りくうあう

一 主人云くせん患のかたハ不忠あかめ患く  
本患あう今日も新糸ハげのこく  
二六時申らん信めハ悪事出へう  
るあう

一 主人ハ有て其身をとりりらと怨  
を捨く沙為第一とらう  
人よさらん持あう

家老の持事

一 身は憐れんと離れ嬖亂とやめ氣  
随とまらと我はな事と止めしやな  
る事と用ゆへ主人の仕主とさ  
すまの方共者へ我う定規とあう  
たもるく少と持へ人のた  
つやうに依り人共禍起るとも是ん  
をかへあう事とまらと主人の氣

またふひたる人きともしめて  
涙とた〜〜如左なきに泣く〜  
身よ咎とまらぬ人もとそらねる  
やうにん波へ〜

一 依怙員ある〜〜親兄弟つ  
門ありとも苦ハ昔よ〜〜あつて悪  
め〜〜志〜する事第一あり必  
ら依主人ハも〜まで常く近附と

も〜細うある事ハ知〜に家老の役  
ふあるある千う七つ八つハ家守の只と  
実とする事多〜〜然るに依怙員  
ある〜ハ圍板とある事一我身は  
行と能すも〜人も能く〜  
ある〜我身〜〜に是あるハ〜  
〜〜〜〜〜  
〜〜〜〜〜  
〜〜〜〜〜

一 朝寝すべしに家を朝寝好むる  
ハミヨリとも朝の役は之より  
ある

一 身は徳せざる事一せはひう事なり  
但武具刀服指懸名類ハ一通り嗜  
むべしを解ハ身代は徳すべし  
一 世るとも勤る事能くは仕るべし  
切くは代は出るハ主人への非儀

るべし主人は用はとて度く用はと  
り事能くは主人も度く  
くん整るべし  
一 用は之すハ是第一の力なりか  
るべし天理は宵く由る事一  
出す是天よ合はさるる信  
つ  
一人の出入の者

ハ必らひゆと申すへう〜ハ又申ん  
行を家持事と修るへ〜尚彦く  
の間は合すゆとめあつとらん好ゆと  
申すま〜と事

一 家老より下りの侍も主人へ事公程  
と申しらんゆ 第二ハ家を代はんと  
とかり仕立と耳ふと〜とめ家老  
は氣よくるゆにす〜是主人

この武法あり 飛氣入と〜もうとを  
つゝまひす〜と事〜とら〜輕信  
と〜〜氣入るへ〜は申さる  
あ〜は道と氣よくるハ申さる  
つゝ飛ハ言と〜者ありとも家をと申  
阿〜ハ家小堪忍るへ〜ハ  
一新系代者と古事ゆ元は能く家持  
飛法とたらぬと〜と事〜

家より作り他法習らる事一もあらざる所  
とも云ふ道ハ何方も同意あり其  
扶行正しくしてたゞ其みまゝに  
時ハ忍ぶ家と心得えさるる長  
居ハ忍事ハ其基あり

一 古系此者主人と云ふ事ハ新系  
の者と引きて知る事ハいひ教へ家  
の他法と云ふ事ハ世系と云ふ事あり

あすへ一如何又古系よりとも我  
まゝと期る者に依り新系の者ハ  
見ゆとも云ふ事ありと云ふ事あり古系  
此者他法第一たる事一家を以て  
と云ふ事能く云ふ事

一 数年一昼夜を云ふ事一とも氣  
附くる事一人を云ふ事ハ代なりとも  
際をとらる事一と云ふ事と暮らす

事一終る一情源く理非くいふこ  
と終る結ひても後代の主人とて  
情よ思替り事一あるいふ一は

一 事一終る主人の事一は家名を以て侍合とて  
しるすもあはれなりとていふ一は  
一 事一はあはれなりとていふ一は  
てひけのちる人う一ふ叶をさるには  
もたらしとて人のも一は或はよはれあはれ

登人同前的事一たる一は取の事ある  
一 事一はあはれなりとていふ一は  
之居のよ調法ありとていふ一は  
事一はあはれなりとていふ一は  
一 媼乱る人の風よよとていふ一は  
事一

一 親たる人よよ者行ハ人知あるとて天  
も如何行末悪かき一 主親ハ深



く教ふへ

一 大身小身侍らざるに理法を弁く  
改へし理法を二つをくす

一 人間を生きて臆病ある者あり  
そとあり常ににん無けあへし  
る人なるへし子細ハ積積切らざる  
者あるし我もハ臆病なる人ハか  
もく之徳を申へし用らハ考へる

あるし深く先祖の恥と悲み命を  
惜まざる事らさるる者あり

一 我う知らざる諸事ハ愚者多し我  
得らざる事ハ他人とてあると  
ある事法なり面々の数多きこと

一 慥勤ふする人ハ徳多し一  
る人換多し

一 大名大身侍りくまて諸事一ゆつぎ  
早——日る——大車——一運——  
ころる——程ころる——能ん持へ——  
一 悪く人の落目と救ふ事一をあり  
一 我うひるこころある人らひ事一にして苦悪  
の批判するに及ぶ——と見以負ある  
人々と大は其のあまを悪くすくか  
らひおまひけとあま——とたれひお

果しとあり 貝懸負ある人と思ひて其方  
難もつころる——にいふ——おまこころ  
くいけなたら——ハ是非よ及ハころる  
つま

一 かまハ大車大車ハかま——とんたへ  
——たるの——ハ一門充る申お  
あ 談合するに由る大なりぬハ成ころ  
あるとかま——大車——とらふハ一言の儀ぬ

く少果す事一はあるものありと後  
るゆへ少事一は大事と信むべし  
一かり初ふ事合とも彦彦は元の縁  
者親類とといひ也一断るも氣を  
つけ寒ゆるるゝゝゝゝのひびす  
一窮屈なる事おと好く樂なる事おと好  
く

一我役目ハ武藝あり他法勤ハ身ハ  
樂とも波もく一樂むとも人の  
暇ける事一ハ信むべし  
一傍業元ともくく時ハ何根のこ  
りりとも透るゝゝゝゝ目かゝる  
めハ急用のる綱中一と断るゝゝ  
急用ハ事ともいふあり  
一五人の口はくゝ朝夕食終かりゆ

も箸と並出へー何根の急なる法  
用も急なる食給は出する事と急  
前たるへー

一 毎朝子方に起先髪とゆひ食とま  
く後中へー事なる人々如何根は  
事々に乞出するも出るへーと急  
あると

一 夏冬ともに子新帯と急くすへ

一 急なる事と急なる事と急なる事  
根指と急なる事と急なる事と急なる事  
急なる事と急なる事と急なる事と急なる事  
急なる事と急なる事と急なる事と急なる事  
急なる事と急なる事と急なる事と急なる事  
急なる事と急なる事と急なる事と急なる事  
急なる事と急なる事と急なる事と急なる事  
急なる事と急なる事と急なる事と急なる事

一 急なる事と急なる事と急なる事と急なる事  
急なる事と急なる事と急なる事と急なる事  
急なる事と急なる事と急なる事と急なる事  
急なる事と急なる事と急なる事と急なる事  
急なる事と急なる事と急なる事と急なる事  
急なる事と急なる事と急なる事と急なる事  
急なる事と急なる事と急なる事と急なる事  
急なる事と急なる事と急なる事と急なる事



山ハ主人の心身限らざるものあり

一 多量の心も落さずと好む一層

宿を好めたるせふなり俄よりす

心の時にか一けるものなるを新

火ふあつり舟へすす但一病人

を人ハ格別ある

一 火をみるにゆるとも心持をへ

火事にくらからんを舟度へ行當

儀もあつり子細ハ我家ハ火をか切

出る事あつりさうはとさ思ふに

手負死人はあつりともなり能くを

舟へ

一 旅立とも舟渡一宗合馬次等にて

舟を舟へ一泊りして火事あるは

しとて出る道筋をせん運入をあり又

宗用をさる宿と思ふらん愈して明

とを〜

一 不辨んかき食おの業耀と好むく

〜〜に癖又成あり急ある時帝冠

候なり常に公思と怒くは麻菜と

給有へ〜急なる時の嘔をり

一 不辨かの事〜に業と好み兼お葉

氣有は類何も好む〜〜に

一 人よか〜其ののあら〜も云んか〜

〜〜ん根急まるあり情む〜

一 身代恰好お意〜〜〜あも嘔む〜

〜書有ぬ及び〜のあら〜

一 旅あ〜一里二里遠〜とも河を越す

〜〜と川と前〜並〜〜に釣

川を越せ〜下〜一日か〜〜の

あら〜釣も〜二里表と〜〜〜

〜〜〜と〜〜の事〜〜〜

つら〜とめるさ

一 宿を立とて一人を呼ば残し一彦を  
そとにせ見えたり出〜かき〜に  
道具を〜とある〜ま〜のあひ  
一 急な旅とる〜自分もよ〜後  
と小財布に二百より腰に付し  
下へ付来〜とる〜は食あふと  
る残り〜馬士と習る〜とる

ま〜する士の前へはも前のるさよ〜  
精細〜い〜後よ〜は〜  
まよ〜い〜も〜人〜  
る馬士精細と出さのあ〜か〜の儀ま  
〜とある〜  
一 夜中〜あり〜と〜挑燈我より〜  
持〜に〜先見〜ぬりのあ〜同〜  
並〜お〜と〜能母〜と〜



あつと

一 空用んなるる瓦と夢とをいハ夜寝ぬると  
とこ宵は寝たる瓦とく刀根持の下  
緒と結い合せ枕の下に結目と垂大  
山支脈よこけまへ——急なることと大  
ゆう丸まへ二ら——とも丸道取らうを  
丸寝の事

一 空用をある道中と通るととと離と持  
へん持あるあつと

一 遠うけ者のこととをりあう——刀ぬけ  
さるものなることと傳之尺人よりハ三巻  
に走りあう——板のありむきし人よ  
傳ふへうに

一 刀は下緒長うと肩へ——俣初ふも履  
くハ肩へうに

一 仕者のことと前よと後よとあへうに

刀打付らんとて一度祠を舞へ

一 旅道具帳初のとりのまとも成へば

と手短くちいさな帳を作らへ

めく道具丸らへ

一 所は片付まへ

一 敷軍れとてまめ板を床腹中へ吞

込危く強登よとめきたらとも

せんめて大便よしらとめちる

合香  
やう

に傳  
り

一 手負血崩さるとして我由便を仕

かへ

一 常く心得へ男ハ男れきひの

なり女ハもんをれきひ者ならへ

神よも女の指し兼女れ中事を受

へへへへは笑入あるの基たる

へ

一 彼物よ寐らるひても眼さしとるは  
うすすむとて並入るは  
一 不斬若人と親むとてあはれ人あ  
ふともそとす入るは人得る  
一

高虎の古祿歌

友いたるに車ある人とはむま  
後いなることと道と急る

け古祿歌「道春服取漢路及依久間  
大膳及回信濃及延壽院各和歌成  
さししとて人の歌よ

我よまに人のけしとあはれ  
ひよあはれし我あはれと  
けしと常く公得并要あり  
山城の路の渡りた瓜つと  
とちりかくさるるはらとら







見合や上へ一應二應うてゆる  
こまごま半も是るへ一如何の家  
老よりとも見合せ重て折と見  
合や上へ一且よ言ひやりにか叶  
ふんと聲高まるりや半津義  
あらと散り科人の扱よあらと主人腹立  
て免とくさう者多んすす終句折言と  
はえりうせうくに成る事一なる

お及びさうし家老も一懸入首尾よ  
する上はさうし身代と破らうと返くさ  
もかこんなる人の仕形あらま

一家をさうる人う傳書のものによさ者  
ありさう主人の重寶ある人たり  
とも人の言ふ事よして合やへうに  
必らぬ人の言ふ事よ合の事ハ公あらま  
人の言ふ事よ細はん所の者とも

今世中ける家老の心骨に成へ  
主人の心骨のありかへよと家  
老ハ潜く融く者ふ也ん骨も何ん  
——と上へ——心骨ふ通くる人  
家老よ尋せとも存せぬん骨も  
事と感——事——家老の心骨  
る——  
下と——と上へ——事——

——世に——通へハを事  
——と上へ——心骨ふ通くる人  
家老よ尋せとも存せぬん骨も  
事と感——事——家老の心骨  
る——  
下と——と上へ——事——







